大佐渡石名天然杉・春

2013.5.13

2011年8月に佐渡の天然杉を初めて見て以来その雪の中の姿が気になるようになった。とは言えそもそも不便な地であり、真冬に登るのは殆ど不可能だ。いわんや、2013年2月に東京から岡山に移住したため、アプローチだけでも遥か彼方の地となってしまった。

しかし、この春には何としても見たくなり、関東方面に出かける別の機会ができたのを幸い、佐渡に寄り道（？）することにした。とは言え、山に入れるのか？林業振興課に問い合わせるともう5月だと言うのに、「いまだ雪が深く林道は閉鎖中、入山は遠慮してくれ」と言う。やむなし、奥の手を使わせていただくことにし、天然杉遊歩道の手前までは何とか車で入れそうな感触を得た。

燕三条で友人と新潟の淡麗な酒を痛飲した翌5月13日、五月晴れの中を佐渡に向かい、知人のT氏の車で石名林道へと入った。

檀特山（905.6m）

両津の港から直ちに大佐渡の北側の石名に
向かう。通常であれば南側の和木から向かうの
だろうが知人の領分へ大回りする。
平地はもうすっかり初夏、田植えの真っ最中だ。
林道を登るにつれ季節が冬へと戻って行く。

雪畑山（1002.9m）

車は順調に進んだが登山口まであと1KMの地点で林道は残雪に覆われてしまった。2年前の夏の記憶を頼りに往復2時間と決め一人で大杉に向かうことにした。T氏にはその間待っていただくことになった。

林道を跨いで積もった雪は上下の斜面をつないで谷底へと薙ぎ落ち、思いがけず厳しいトラバースを強いられる。

雪の消えた舗装道路の上を雪解け水がきらきらと輝きながら川となって流れ、林道の側面には無数のフキノトウが噴き出している。春だ！

雪の重みで変形したガードレール
の隣では紫と白のキクザキイチゲ
が元気な姿を見せている。
冬の厳しさと春の歓びが混在し、
たった一人のぼくはどきどきしながら
歩き続ける。

車を降りてほぼ30分、夏場の登山口に辿りついた。足元が滑りやすく、途中分岐かと迷うようなところもあり立派な案内板を見てホッとした。
右側の案内板には雪氷からの保護のために水色シートが掛けられている。この上の遊歩道の案内板もそうだった。大杉の森を守る人々の思いやりが伝わってくる。
大杉へ向かう砂利道は所々雪が解けて何とか道なりに行けそうだ。

登山口からジグザグに登るとほどなく最初の巨杉。
下部の枝は雪に押しひしがれて、まるで杉を支える丸太のように垂れ下がり、枝先は厚い残雪の中にしっかりと抱え込まれている。
もう少し雪が融ければ、枝先はある瞬間雪から解き放たれ、バシン！と音たてて跳ね上がるのだろう。樹全体がその時を待って緊張しているかのようだ。

残雪の反射光を受けて、無数に伸びた上部の枝がくまなく見える。

長大な枝を持った杉の群れが現れる。
2年前の夏には枝を振り回してチャンバラ遊びをしている少年たちのように闊達な姿だったが今は苦しい戦いのあとの兵士達のようなボロボロの姿だ。

林道は所々で雪が途切れ、フキノトウが顔を出している。

南面の林道の雪はすっかり融け、道端に、春に向かう行列のようにふきのとうの芽が延々と並んでいる。真っ赤な尖った新芽は正に春だ。
しかし、15分ほどで到着した遊歩道入口付近はすっかり雪に覆われ、どちらに向かって良いか分からない。左手奥に辛うじて歩道の一部が出ており、ようやく方向が分かった。前途に不安を覚える。

林の中をあちこち眺めて方向を確認しながら進んでいる内に突然目の前に長大な湾曲した枝が現れた。象牙杉だ。
あまりに不意に現れたのと、痩せ細り、疲労困憊の様子に一瞬象牙杉だとは認識できなかった。
夏とは大きな変わりようだ。

2011年夏の象牙杉は象牙の先端をぐっと持ち上げていかにも力強かった。

1番目の大杉には出会えた。
遊歩道が雪に埋もれているため正しい方向を辿っているのか？との不安はあるが逆にどこにでも足を延ばせる。
すると前回は気付かなかった杉に出会える。
優しい目をした象さんが現れた。

象牙杉ではいささか不意打ちを食らった。次はどっちだと思いつつ雪の下から時折のぞく遊歩道の境界ロープを頼りに進む。するとほどなく森の中に空間が広がり、下の方に四天王杉が現れた。象牙杉からこんなに近かったのか？と思うような距離だ。樹肌は剥いた様に赤く、根元には折れた枝が散乱している。

4本の幹の回りは雪が丸く融けている。そこに小枝や葉っぱがうずたかくつもっている。冬の間の戦いの残骸だ。2011年8月の場合は樹肌はしっとりと湿り、回りを緑の灌木に囲まれ、力強く、穏やかな様子だった。春、夏を過ごせばあの力強さを取り戻せるのだろうか。樹の表情は季節によって大きく変化する。

2011年夏の四天王杉は正に力にあふれていた。

厳しい冬をようやく乗り越えたばかりの無残な杉の姿の連続にすっかり心を奪われた。
太い腕をもがれ、しかもまだ残る腕をがっちりと雪につかみ取られている杉が現れる。
大黒杉だ。夏見た折にはすくすくと育っている杉と見えたが、この戦いの様はどうだ。
粛然たる思いに駆られた。

枝と残雪の最後の格闘が繰り広げられている。
突然、すぐそばの樹の枝がバサッと音を立てて跳ね上がった。力づくの自由の確保だ。

林の中でとうとう方向が分からなくなった。

腰をくねらす揺らぎ杉

灌木は雪の下に素直に横たわるだけ

大国杉を過ぎ、上に若木が継木の様に生えた大きな切り株に出たところで遊歩道の痕跡は消えた。
5本目の羽衣杉までは何としても辿りつきたいが方向が分からない。
まずはまっすぐ正面に進む。ドンドン行くと突然足跡が現れる。ああこれで良かったと思うがおかしい。大体ぼく以外に人は入っていない。
右手に水色シートをかぶった案内板がある。よくよく見ると先ほど通った遊歩道入り口だ。足跡は先刻のぼくのものということだ。
慌てて元に戻り今度は右手の斜面を登る。とうとう方向が分からなくなってきた。
ふと見ると高い鼻と、深い目、まるで動物の顔の様な突起を見せる杉が現れた。杉の精か！じっくり眺めて気を落ちつかせて、左右前方へそれぞれ20歩づつ進んで何らかの道の痕跡が無いかを調べる。

15分ほど左右を確認してようやく羽衣杉への道を探り当てた。道さえあれば何気なく歩ける場所でも一旦雪に覆われるとすっかり分からなくなる。それにしても羽衣杉の疲労困憊ぶりは驚きだ。2011年の夏にはつやつやと張り切り、千手観音の手のように突き出ていた枝は、ようよう冬を生き伸びてまるで物乞いの手のように、弱々しく差し出されている。これから夏にかけて、光合成を繰り返し、杉はかつての雄姿を取り戻すのだろう。

春の杉と夏の杉

雪道に迷いながらも5本の杉に出会った。
杉は正に命がけで冬を越し、疲れ果てて春を迎え、そしてこれから命を取り戻す。
ぼくはその姿を見るために遠い距離を越えてここまでやって来た。
暗い森を抜け、明るい林道を急いだ。結局T氏には2時間フルに待機していただくことになった。感謝。